

---

# 帰省

市丸乱菊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帰省

### 【Zマーク】

Z8032H

### 【作者名】

市丸乱菊

### 【あらすじ】

日番谷冬獅郎が帰省します。帰省する道中でいろんな人に会いました。そして・・・

# ひと時の休息。

戸魂界の死神たちも羽を休める。

んじや、松本。

俺は明日休みだから後はよろしくな。

くれくれも！！

「」・・・・・

二二〇は十番隊

隊長田畠谷が副隊長の松本に言った。

一 大丈夫ですよ

いはしりがい

——手を振る。

なんかこいつ一人だと心配なんだけどなー・・・

ばーちゃんも心配だし。

本人がああいうのだからまあ大丈夫なんであろう……。

田畠谷は扉のまわりに向かっていつた。

—あこたいちよ—

「おはれんじ」へ

卷之三

図星の田番谷は、振り向かずに少し赤くなつて怒つていた。

西流魂街手前の甘味処で大好きなお土産を買う。

「あつ。日番谷君つ！」

聞き慣れた声が聞こえた。

「性  
殖  
林」

振り返ったその先に、田番谷の幼馴染で五番隊副隊長雛森と五番隊隊長藍染がいた。

「ハセヒロ、田番谷くん。」

「ハセヒロと笑つて右手を上げる藍染。

その横には雛森がちよこんと居た。

「ああ。藍染・・・」

「あー。甘納豆買つてるハセヒロは、おばあちゃんち帰るんだ。

明日休みなの?」

田番谷の中のものを覗き込む。

「うつせーなあ・・・。」

少し赤くなり後ろに隠した。

「私も明日休みだつたら一緒に帰るんだけど・・・・・・・・・。」

「雛森くん。業務なら気にしなくていいんだよ。

君はいつも頑張ってくれてるし、明日休んでくれてもいいよ。」

優しい笑顔を副隊長に向ける藍染。

「でも隊長っ・・・」

少しでも藍染の傍に居たいといつのが雛森の本心だった。

「雛森くん。隊長の言つ事は聞くもんだよ。」

そう言つて雛森の頭をやわらげて撫でた。

「わかりました 有難うござります。藍染隊長っ

雛森に満面の笑みがあつた。

「ガキくせー・・・」

日番谷は面白くない。

「ひでじひ」と、わたしも帰るつておばあちゃんに言つておいて  
ね

雛森が手を振つて走つていぐ。

「雛森くん。気が早いなあ・・・

じゃあね。日番谷くん。」

右手をさつと挙げ、雛森の下へ歩いていく。

「藍染隊長――ひ――早く来てください――――こつ――」

「はいはい。」

藍染は笑みがあるものの、ちょっとした呆れ顔でヤレヤレといった模様。

「さて。俺も行くか。」

そして西流魂街に向かう。

そしてそこには西門がある。

「ややつおめえは・・・！」

冬獅郎さんだが？

西門の番人・？丹坊がいた。

「元気そうだな。？丹坊」

田番谷は、そういつとつ？丹坊の元へ走つていった。

「元気だべ！

おんめえも元気そうで何よりだべ。」

「今口せばあかや なんに睡るんだ。」

門を開けてくれよ。」

昔からの友達に子供じこに笑顔を見せる口番谷。

「よつしゃー。」

どいててくんる。

「気にいべどーーー。」

門の下に指を入れた。

「ぬづん!ーーーーー。」

門が上がる。

「ほら。どおれー。」

「ありがとう。?丹坊つ」

「あだりまえの?じだあ

やつして口番谷が通ると、門が閉じられた。

「毎回悪つが流石だな。」

「?ねぐらこしが、できねーんど。」

「こつものトクセツしてくれよ」

田畠谷はが近づいた。

「よつじゅーひー。」

そつまつて、丹坊は田畠谷を持ち上げ、そして肩に置いた。

「#畠谷はが近づいたなあ・・・・」

田畠谷は友達がいなくて、相手といえば離森かばあちやん、そして  
「の」のへ丹坊くらいだった。

「冬獅郎さん、隊長つでえのはじんなだ? だのしいが?」

「つーん・・

難しいなあ・・・・

副隊長はサボつまくつてるが、他の隊員たちはみんな真面目に仕  
事してくれてる。

仕事が多くて・・・・・・

俺の場合年が若いだけに気を使つといもこりこりあるしな・・・・

「

じぱりくの間、話が弾む。  
「いろいろだいへんなんだな・・・・

「また明日来るぜ。」

日番谷は振り返って少しだけ手を振って別れた。

「ばーちゃんっ！」

「ただいまーっ。」

一人の影が日番谷に気付く。

「おや、冬獅郎かい？」

「おかえり。」

おばあちゃんが玄関まで歩いてきた。

「これ。

買つてきたよ。甘納豆。」

俺が出て行つてから、ばーちゃんは少しづつ元の体系に戻つている。

安心した。

「「」れはありがとうねえ。」

「今日も、離森も帰つてくるつて。」

「あれまつ。桃も帰つてくるのかい。」

二人一緒になんて珍しいねえ・・・。

今日は「」飯奮發しないとねえ・・・。」

久しづつ家のじいひんと寝転がる。

あー。

この感触・・・。

懐かしいなあ・・・。

なんか眠くなつてきたみたいだ・・・。

いつも「」の時間には昼寝してるのだから、当たり前だ。

「おはようつみ獅郎。」

色んな事を思い出す。

「こりでずっと氷輪丸が呼んでいた・・・

俺の育つた家。

懐かしい感覚・・・

「顔・・・ちかーん・・・」

「おばあちゃん。シロウちゃん起きたよー」

「あつ。起きた。」

昔みたいな光景。

田が覚めた。

「シロウちゃん。」

「…………」待つていてくれる、ばーちゃん。

物思いに耽りながら、起き上がる。

「シロちゃんが寝てる間にね、

これ、おばあちゃんにあげたんだよー！」

といつて、田の前に出したのは……

九番隊が編集している「真集」冬の「トイオントビ」と「グラビアカレンダー」だった。

カレンダーなんかもう飾られていた……

「…………

おこつ……！

ちょっと待てつ……！

お前、なんでそんなもん持つてんだよー……！」

めちゃくちゃ焦った。

まさかそんなものを雑森が持つてくるなんて思ってなかつたからだ。

「え――うと・・・・・

內緒二

鈴森は少しテレながらぐく。こと悪戯でぽく笑う。

それはそれで可愛いのだが、何かがおかしい。

松本だぞ！」

曰番谷か咲んた

な、なんてね、か、た、の、?

話題さんは言わないと、で言われたのは」「（アセアセ）

じめんたさい、  
舌蘇さん……と  
御前森は心中で思つた

「たゞ貴君と上る。」

い、もの、事であな

一 ジジに戻る途中に出会い、渡されたのよ。

シロがん

おばあちゃん、本当に喜んで見ててくれたんだから。」

雛森がフォローする。

おばあちゃんが「ここの」しながら一人を見守っている。

「二人とも元気で何より。

ばーちゃんにはそのことが一番嬉しいんだよ。」

「ばーちゃん・・・。」

「冬獅郎も桃も元気で楽しそうしてくれたならそれだけで、ばーちゃんは嬉しいよ・・・。

まあ一人とも」「飯お食べ。」

いつも優しいばあちゃん。

その優しい声を聞くだけで安心感が得られる。

「飯を食べながら、3人はいろんな話で盛り上がる。

雛森は自分の尊敬する隊長の話。

田畠谷は自分のさぼつてばかりの部下の話がほとんびだつた。

寝る時間になると口番谷と雛森の間に座り、一人の胸の上をポンポンしてくれる。

「ばーちゃん・・俺もう子供じゃないんだぜ・・・・・」

「小さじとぎを思い出すわ・・・・・」

一人はその懐かしい安心感に捕らわれ、すぐに寝入ってしまった。

そういう大きくなつた一人を見ていた。

「いつの間にこんなに大きくなつたのかねえ・・・・・

こんなに小さかつたあの一人が・・・・・

死神様の隊長、副隊長だなんて・・・・・・・」

おばあちゃんの目から涙が出て止まらなかつた。

そのことを一人の若僧は知る事はなかつた。

「ふあ―――。早いかな・・・・・。」

## 目が覚めた。

ここに帰ってきたとわせ、おばあちゃんが困らなこよし、枯れ木や枝を集めて置いておくれた。

「…ひんせひんせ！」

先に起きていたらしい雛森が後ろからドンッと背中を押した。

びつくりしている田畠谷。

「お前・・・寝ショソベンはしなかつたのか？」仕返してひみつと意地悪に言った。

「ウチモリ」

何十年前の話してるのよつ！――！

ちょっとは覚えがあるひしー。

こういう光景も懐かしかつた。

「なんになるとせうひでもこう。

いくぞ、  
雛森。

「うんー昔みたいにどっちが多く集めるか競争ね」

「……! まけねーぞつ……」

一人は走り出した。

日番谷は途中、雑森の友達にも会つたが、特になんとも思わなかつた。

昔は田に見えたといひにいるだけでも嫌だったのに。

今は仲間もいることで、精神的にも強くなつていたのだ。

17

前が見えないくらい枝を抱えている田畠谷。

一人が帰ってきた。

「お帰り。いつも帰つてくるたびにありがとうございます。」

おばあちゃんが言った。

「おばあちゃん、シロちゃんたらねーつ・・・・・」

「あ、こひー！離森つ！……言つなつ……。」

やじはせ二二二二二おひつへくれる優しくおばあちゃんがいた。

そんなこんなで夕方まで過いでした。

「ばーちゃん俺たちそろそろ帰るよ。」

おばあちゃんの顔を見た。

少し寂しそうだった。

「また帰つてくるからね・・・・・。」

離森はおばあちゃんに抱きついた。

「また遊びにおいで。」

やつれて見送つてくれぬおばあちゃん。

大好きなおばあちゃん。

去つていぐ一人の子供たちを見ながら、

おばあちゃんは涙を拭つた。

決して一人にはバレナイよひこ・・・・・。

田番谷と離森は、丹坊の元へ行き、門を開けてもらつた。

そして離森の五番隊隊舎の前まで離森を送つていつた。

「田番谷君、また戻るとお教えてねつー。」

「わかつたよ・・・んじやな・・」

離森の田番谷の呼び方が変わつていた。

田番谷は後ろをむかずに右手だけを挙げてサヨナラした。

そして田舎谷は自分の十番隊隊舎に向かう。

「松本はちゃんと仕事してるだろ？」「…………」

それだけが気がかりだつた。

「執務室、少しだけ覗いていくか・・・・」

執務室の前にたどり着き、ガチャっとドアを開ける。

「松本！ 今戻つたぞー・・・」

中を見ると・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なんじや」つや――――――――――――――――――――――

日番谷の田にしたものは、酔いつぶれて寝てる松本。

そしてその周りには空き瓶が多数転がっていた。

卷之三

冷たい靈圧を漂わせて叫ぶ。

「はいっ……」

毎度の「」とながら常日頃からお叱りを受けてる松本。

条件反射で起きる。

「お前仕事はしたのか?」

「えつと……………忘れてました」

「……………やうか……………今からできるよな……………」

冷たい視線で松本を睨む。

「え―――――っ、今からですかあ?」

「あっ―――そ、うだ松本つ―――!」

お前難森に何渡してるんだよつ――――――

「おばあさん喜んでたでしょ? わたいちよ――」

松本のペースに流れ起こる氣も起きず、呆れるだけだった。

「もついいか、り――

早く仕事しろつ――・・・・・

「はあ――・・・・・・・

そつまつてテスクに向かつた松本。

「うう……」

と口を押さえる。

「ザツ……！」

「なんとこで吐くなよっ？！？！」

便所行け便所つ……！

涙目でうなづんと頷く松本。

走つて出て行つた。

「はあ……」

それから松本が戻ってきたのは、日付が変わった朝でした。

「ま――――――つ――――――と――――――」

松本さんは、田の下に隠ができた隊長に、昨日のが演技だとバレて散々怒られましたとさ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8032h/>

---

帰省

2010年10月11日13時42分発行